

平成30年度冬学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
1	作物学特論	18660006	9	5	55.6	4.64	すべての項目について、平均を上回る評価がえられている。特に「教員は、毎回の授業で、学べべき重要な目標を明確に示した」、「教員の説明はわかりやすかった」、「教員は、授業に十分準備して臨んでいた」および「総合的に考えて、現在この授業に満足している」が4.8と高い評価となった。しかしながら、4.4ではあるものの「シラバスの学習目標は明確だった」の評価が低くなっており、シラバスの更なる充実が必要であると考えられる。	シラバスの内容を再度確認し、講義内容との整合性を高める。本講義は、テキストとPPTを使用し、テキストの内容を補完する形でPPTを用いた。テキストの内容が若干古くなっているため、PPTで最新の研究結果等を加えながら、学生から興味をもたれる講義に努める。	
2	天敵利用と環境保全型農業	18660012	7	6	85.7	4.51	受講者数が少ないとはいえ、ほぼ全員から回答を得た。設問の共通項目の7割で平均値を上回っており(うち5つで平均値を0.4以上上回る)、満足度の高い演習科目を実施できたと判断する。ただ「主体的学修」については低い値となっていた。これは長期の野外調査などのため出席率が低い学生がいたためもある。今後も評価の高い演習科目を実施していきたい。	今後も評価の高い演習科目を実施していきたい。	
3	動物・海洋生物科学演習第一	18660116	26	6	23.1	3.68	本講義は各研究室(分野)ごとで指導する形式を取っており、動物・海洋生物資源学に関する高度な専門知識を習得することを目標にしている。座学でないことによりアンケートの回収率が低かったものと思われる。提出された6名のアンケートに対してそのうちの1名が明らかにすべてに1を付けた形跡が認められる。それを除けば総合の平均点は4.2以上となり、概ね満足度のいく指導がされたと評価できる。	アンケートの回収率の改善に関しては、座学と同様にアンケートに回答するように学生に伝える必要がある。すべてに最低評価を付けた学生はその分野の指導に不満を持っていた可能性があるが、無記名のアンケートではその研究分野を同定できず、改善を求めることが難しい。	
4	樹木生理学特論	18661004	7	7	100	3.79	期待していたよりも評価が高かった。一方で、こちらの熱意が空回りしたように思う面もある。学習デザインの評価が低かったが、これは講義内容を臨機応変に設定したことによる原因があると思われる。	卒業前の学生は概ね興味の対象が絞られているように思われる。そのような状況下で如何にして学生の興味を掻き立てる講義ができるかを考えていく。学生数が少ないので、今回のアンケートの結果に対して偏った判断をしないよう心掛ける。	
5	林業経済学特論	18661007	7	5	71.4	4.48	総合評価が4.8で、項目別には学生と教員との双方性(共-60)が5であった。その他の項目では、授業内容についてより深く学びたいが3.8であったがそれ以外は4ポイント以上だったので、内容的には概ね評価されているといえる。	今年度から2単位を1単位として、クォーター制の導入で、学期期間が短くなったため、昨年度まで行っていたゼミ形式をやめ、共読形式に変更した。その結果、能動的に質問する機会が増え、学びの姿勢を高めることができたと感じている。この方式を維持しつつ、林業の最新の動向とともに林業経済学を深く学べるような本の選定を工夫したい。	
6	木質材料工学特論	18661304	13	3	23.1	3.47	説明の分かりやすさ、学修意欲で高い評価を得た。それ以外では低い評価であった。	双方向性を重視し、学生に取って、興味の沸く授業を心がける。	
7	生体物質化学	18661306	14	14	100	3.85	サステナブル資源科学の中でも特に重要な「生体物質の化学」に焦点を絞り、基礎から最先端のナノ・バイオ研究までをオムニバス形式で講義した。初回講義時に、本講義の学問背景と学びの方向性を定義づけるために、「序論:生体物質の構造と機能」を講義し、生物の動的な構造形成と機能発現の考え方・捉え方を理解させた。続けて、森林微生物の産する生体物質、生体物質の化学、メディカルナノバイオテクノロジー、結言:森林に学ぶ生体物質化学を講義したが、結果として、全ての評価項目が本学府講義科目の平均を大きく下回った。学習目標の明確さ、教員の準備状況・熱意の評価が特に低く、総合的にも、受講生は本講義に満足していない。特定の教員の講義について、「内容がとても薄く何を教わったか全く覚えていない」との指摘があり、至急の改善が必要である。本講義は学府改組後の初年度の講義であり、4名の教員で対応したが、担当講義間の連携に乏しく、一貫性のなさも課題として残った。	平成30年度の学府改組により新設した本アドバンス科目であるが、初年度は失敗したと言わざるを得ない。大学院での講義では、内部進学と外部入学の学生で基礎学力に大きな差が見られることがあり、それは十分に考慮して講義しているはずであるが、本年度の受講生から聴き取り調査を行うなどして、有効な対策を講じる必要がある。また、本年度は教員間の連携がほとんどなかったため、次年度は講義内容のすり合わせを事前に十分に行う。資料配布など復習のサポートや、オフィスパワーの活用についても検討を図る。	
8	食料農業政策学特論	18662006	4	2	50	5	登録者4名、うち回答者2名なので、数値評価の分析は難しいが、一応、全ての項目で5ポイントだったので、受講者の評価は高かったものと考えられる。	全体として授業の方式は継続するが、常に変化する食料農業政策の進展にあわせて、サブテキストや講述の内容をアップデートしていく。	
9	食料経済分析学特論	18662008	2	2	100	4.9	すべての質問項目において評価が4.5~5.0と非常に高く、すべて生物資源環境科学府の平均値を上回った。総合評価が5.0と非常に高いばかりか、授業の改善要望に関する自由記述もなく、高い評価を得ることができた。	総じて高い評価を得ることができたので、現在の授業を踏襲していきたい。ただ、学生のニーズは多様であるので、授業中に学生の要望を積極的に聞くなどして、柔軟な対応を心がけたい。	
10	食料流通学特論	18662009	6	2	33.3	4.9	受講者数が6名で回答者が2名と低かったので、回答率を上げることが重要である。評価はほぼすべて5.0であった。	評価については、学生の受講態度や意欲以外はすべて5.0であった。しかし、回答率が低いので高める必要がある。	
11	植物生理・生化学特論	18663008	4	2	50	4.5			
12	比較免疫学特論	18663009	8	1	12.5	4.4			
13	食品栄養学特論	18663305	23	22	95.7	4.34	10項目中8項目で、科目群平均を上回っていた。下回っていたのが、共-60「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」と共-67「教員の説明はわかりやすかった」であった。学部からの積み上げ型の授業ですので、数名、栄養化学を全く知らない学生がいました。その学生には、やはり事前に、事前の準備が必要なことを伝えました。双方向性は、Moodleで、さらなる確保をしようと思います。	次年度も引き続きMoodleによる授業を展開したいと思います。クイズやアンケートなどで、理解の程度を測っていきたくと思っています。	なし
14	食品工学特論	18663307	20	15	75	4.27			
15	生物資源論	18665036	22	12	54.5	4.27			

平成30年度冬学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
16	地水環境論	18665037	18	10	55.6	4.26	<p>評価は、5と4が多く、特に5は多かった。1はなかった。この授業は5名によるオムニバス授業の上、今回は1単位授業となって初めての授業であり、試行錯誤の結果、授業内容が十分でなかった可能性はあるが、上記のように、現況の授業で十分と考えられる。</p> <p>一般的な地球科学に関連する専門性を有する種々の課題に関して、講義中に受講者を指名して質問を行ったが、受講者のほぼ全員が大変良く対応しており、講義の内容と趣旨が良く伝わっていると感じた。</p> <p>しかし、講義内容の適当さと学習意欲に関する質問事項の回答がやや低かった。</p>	<p>予定した内容をすべて講義できなかった面もあるので、来年度に向けて、講義内容の適当さと学習意欲に配慮しながら、授業時間配分やレポート課題などについて検討を加えて改善に取り組みたい。</p>	